

心理的エンパワメントが大学生の主観的ウェルビーイングに与える影響

安田, 節之 / YASUDA, Tomoyuki

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Lifelong Learning and Career Studies / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

20

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2022-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030097>

心理的エンパワメントが大学生の 主観的ウェルビーイングに与える影響

法政大学キャリアデザイン学部教授 安田 節之

問題と目的

新型コロナウイルスの影響が長期化するなかで、個人が自らの状況や社会生活を適切に保つこと、とりわけ自己統制感をもつことがこれまで以上に大切となっている。自己統制感の維持・向上は、健康促進・疾病予防はもとより、学びの質や社会生活における主観的ウェルビーイング (subjective well-being) を高め、逆に、統制感の低下や喪失は、個々の生活に様々なダメージを及ぼすことになる。このようななか、個人が適切に自己をコントロールし“よく生きる (live a good life)”つまり主観的ウェルビーイングを高めるためにはどのような視点が必要となるか。その1つに心理的エンパワメント (psychological empowerment) の存在がある。本研究では、心理的エンパワメントが個人の主観的ウェルビーイングに及ぼす影響について、大学生サンプルを用いて明らかにすることを目的とする。

エンパワメント (empowerment) が広く知られるきっかけとなったのは、米国における公民権運動とされ (参考: Dalton, Elias, & Wandersman, 2001), その後、社会科学領域を中心にこの概念に基づく研究が進められてきた。なかでもコミュニティ心理学領域ではエンパワメントが「個人・組織・コミュニティが自らの問題をコントロールするプロセスやメカニズム」¹ (Rappaport, 1987, p. 122) と定義され、アクション

リサーチやプログラム評価といった研究実践の文脈において積極的に取り入れられてきた。

エンパワメントの構造や研究の切り口はさまざまであるが、一般に、エンパワメント理論は時系列的視座 (プロセス・アウトカム) と社会生態学的視座 (ミクロ・メゾ・マクロ) の2つの視座に集約することができる。まず時系列的視座に立つと、個人や集団に生成されるプロセスとしてのエンパワメント (empowering process) と、その結果生じたアウトカムとしてのエンパワメント (empowered outcome) の2層のレベルに分類することができる。次に社会生態学的視座においては、エンパワメントが生じる個人から組織・コミュニティに至るまでのミクロシステム (microsystem)・メゾシステム (mesosystem)・マクロシステム (macrosystem) の3層のレベルに分類できる (Bronfenbrenner, 1977; 1979)。そして、時系列レベル (プロセス・アウトカム) と社会生態学レベル (ミクロ・メゾ・マクロ) の視座を掛け合わせた2×3レベルに基づくエンパワメントの構造は、様々なプログラムの開発と実装において有用となる (例: Zimmerman, 2000; Zimmerman & Eisman, 2017; Matton, 2008)。

例えば、ミクロレベルでのエンパワメントであれば、個人が自らのまわりの人間関係・社会的関係性に存在する資源に気づきそれを管理することにより (ie., プロセス), 結果的に、自らが置か

れている状況や立場を自覚し、健全かつ建設的な批判の認識をもつことになる (i.e., アウトカム)。メゾレベルでのエンパワメントであれば、組織におけるリーダーシップを一定の意思決定者・部署に限定せず、適宜共有することにより(プロセス)、結果的に、当該組織の決まり事の見直しや制度の改善といった組織全体に良い影響(アウトカム)を生み出すことになる (Zimmerman, 2000)。さらに、多様なセッティングにおけるエンパワメントの構造化 (Matton, 2008) やプロセスやアウトカムの向上を目的とした介入 (intervention) の枠組みなども提示されている (Zimmerman & Eisman, 2017)。

以上のように多層的に構造化されるエンパワメントであるが、どのレベルにおける概念化においても重要となるのが、パワー (power) の形態そしてエンパワメント対象の主体性である。一口にパワーと言っても、その形態によって意味合いが大きく異なってくる。例えば、パワーの形態が何らかの対象に対する力 (“power to”) を意味するのであれば、それは「影響力」となり、パワーが対象を覆う力 (“power over”) であれば「支配力」となる。一方、パワーが対象に関する力 (“power of”) を意味するのであれば「関係力」となり、ともに働く力 (“power with”) となれば「協働力」となる。さらに個人の内にある力 (“power within”) であれば、それは「内在力」(c.f., 心理的エンパワメント) ともなる (例：マクリーン・ハンソン, 2019; 参考：安田・梅崎・椋田・三好, 2020)。このようにエンパワメント理論を個人や組織の行動に応用するうえで、そもそもパワーがどのような形態を示すのかを理解する必要がある。

さらにエンパワメント対象の主体性への留意も不可欠である。これは具体的には、個人はその人自身でしかエンパワーされず、そのため、他者が援助者として個人をエンパワーすることはできない (“you cannot empower someone”) と表すことができる。エンパワメントは、例えるなら、魚が獲れずに困っている村の人びとに単に魚を与

える (“援助する”) のではなく、自分たちで魚を獲ることができるように魚の釣り方を教える (“エンパワーする”) ことを是とする。したがって、前述の Rappaport (1980) の定義にあるように、個人が自らの問題を自ら統制・コントロールすることこそがエンパワメントの礎となるのである (安田, 2019)。

ここで言う自らの問題とは、狭義には個人の事象 (例：ストレスや不適応)、広義にはその人が置かれている立場や状況あるいは環境 (例：社会関係や社会的文脈) のことを指し、その問題はミクロシステムからメゾ・マクロシステムまで幅広く存在するものである。どの問題にどうアプローチするにせよ、自らがもつ力や資源は何であって、それをどのように利活用すればより適切な問題解決につながるか、これを問うのがエンパワメントである。以上の点を踏まえると、エンパワメントとは「自らの内なる力に自ら気づいてそれを引き出していくということ、その力が個人・グループ・コミュニティの3層で展開していくこと」、即ち、個人の能力やスキルの「顕在化・活用・社会化」と定義することができるのである (三島, 2001, p. 164) ²。

これまでエンパワメント研究は、マイノリティや社会的弱者といったいわゆる“パワーレス (powerless)” な状況や環境に置かれた個人や集団が対象となることが多く、過去には洋の東西を問わずさまざまな研究が行われてきた。翻って、コロナ禍という日常のなかでの学生生活や大学での学び、そして就職活動を含めた今後の初期キャリアの探索など、様々なライフキャリア課題に直面する大学生のウェルビーイングについて、エンパワメントの視点から研究することも必要となってきた。例えば、田村・山本 (2021) では大学生の心理的エンパワメントとコミュニティ参加についての関係性が分析され、主に、個人の強みの顕在化がコミュニティ参加に対して肯定的な影響を及ぼすことが確認された。また、心理的エンパワメントをチームレベルに応用したチームワーク研修プログラムの効果検証を行ったと

ころ、当該プログラムによるチーム志向性（＝チームエンパワメント）の向上に関するあらゆる介入効果が認められた（参考：安田ほか，2020; Yasuda, 2020; Yasuda et al., 2018）。高校生向けの研修プログラムであったが、その効果は、大学生においても期待できるものと仮定できる。

このように、エンパワメント概念に基づくプログラムの研究が様々な領域で行われるなか、それを大学生のライフキャリア支援の枠組みに当てはめて考えることは、根拠に基づくプログラムの開発・マネジメント・評価を進めていくうえで意義深いものであると言える。そこで本研究では、今後の展開に向けた基礎データ収集の一環として、心理的エンパワメントの構造を確認し尺度開発を行い（研究1）、大学生の主観的ウェルビーイングが心理的エンパワメントおよびその他の概念によってどのように説明されるかを分析する（研究2）。

研究1

目的

研究1では心理的エンパワメント尺度（安田，2016）の再検討を行う。安田（2016）における尺度開発では、エンパワメントの本質である顕在化・活用・社会化を大学生がどのように捉えているかが検討された³。本研究では、当該尺度について次の2点を目的とした追加検討を行う。目的①：エンパワメントの定義に則した3因子構造を安定的に測定できる尺度にする；目的②：批判的意識（critical awareness）に関する項目を尺度に組み込む。

まず目的①についてであるが、安田（2016）におけるデータ分析では顕在化・活用・社会化の3因子が抽出された。しかしその後の関連研究におけるデータ分析では、因子構造が安定しなかったり、因子負荷にばらつきが出たりと必ずしも研究に適した尺度構造にはなっていなかった（Yasuda, 2021; Yasuda & Saito, 2018）。主な原因として、心理的エンパワメントの下位尺度であ

る「活用」と「社会化」の内容理解および両者の識別が困難であった点が考えられる。具体的に尺度項目開発のもとになった自由記述のデータ収集では、顕在化に関する自由記述への回答数（N=89）に比して、活用（N=55）および社会化（N=37）の回答数が少なかった。さらに、自由記述の設問への回答の段階で、活用と社会化との区別が十分になされていなかった。その結果、回答内容が互いに似通ってしまっていた可能性が高い（安田，2016）。

例えば、「活用」についての自由記述の設問が“どのような時に自分の力を活かしているか”であったのに対して、「社会化」についての設問は“どのような時に自分の力がグループやコミュニティで活かしているか”であった（参考：脚注2）。これらの設問を適切に識別し、回答を行うことは困難であったと予想でき、実際に前述のとおり、回答数が少なかったり類似した回答が多かったりと不十分な結果となっていた。そのため、これらの収集された自由記述をもとに開発された5件法で回答が求められる尺度項目も、例えば、「何かの活動をする際、自分の適性を活かした役割を頼まれる」（活用）と「自分の考えに賛同してくれる仲間と一緒に、何かを成し遂げた経験がある」（社会化）というように類似していた。結果、「活用」と「社会化」を構成する尺度項目への回答に強い相関関係が生まれ、心理的エンパワメントの下位尺度間に因子負荷のばらつきが生じ、安定した構造（ie., 3因子構造）が得られなかったと考えられる。本研究では、まずこれらの点の改善を行う。

次に、目的②である批判的意識（critical awareness）の視点を心理的エンパワメント尺度に導入することも、本研究における重要な作業である。批判的意識の存在はエンパワメントのエンパワメントたる所以、即ち、概念の構成に必要な不可欠であることを意味している（例：Dalton et al., 2001）。批判的意識の重要性は、エンパワメントとその他の心理概念との違いを考えることでより明確になる（Gutierrez, 1994）。

例えば、ストレスへの対処に関する心理概念

であるコーピング (coping) では、個人がいかにストレスフルな状態に適応するか、そしてそれを促すか、という個人の“内側 (inward)”の資源に焦点が当てられる。一方、同じ状態にあっても、自らが置かれているストレスフルな状況に気づき、その状況はどうすれば改善できるのか、どう変化させるべきか、という個人の“外側 (outward)”の資源に焦点が当てられるのがエンパワメントである (Gutierrez, 1994)。

同様に、自尊心や自尊感情に関する心理概念である自己肯定感・自尊感情 (self-esteem) についても、いかに個人は自らの内側の心理的資源 (i.e., inward resource) を用いて自らが置かれている状態や状況に適応するかが問われることになる。他方、エンパワメントでは、個人がどの程度、自らの外側にある多種多様な資源 (i.e., outward resource), 即ち本来であれば自らの助けになるはずであろう社会的・経済的資源の存在に気がつき、それを獲得できるかが問われることになる。多様な資源の本質を知るとは他ならぬ批判的意識によってであり、このことが批判的意識がエンパワメントに必要な不可欠である理由であるとされている (例: Gutierrez, 1994) ⁴。

以上の目的①ならびに目的②を踏まえ研究1では、安田 (2016) における心理的エンパワメント尺度の項目を加筆・修正したうえで、改めてデータ収集を行い尺度の因子構造および信頼性を確認する。

方法

心理的エンパワメント尺度 (改訂版) の開発: 安田 (2016) の尺度項目をベースにしつつ、より正確に構造化された心理的エンパワメント尺度にするための開発を行った。また改訂された尺度項目について、英訳担当1名・和訳担当1名の計2名によるバックトランスレーションを行い心理的エンパワメントの英語版尺度も作成した (例: Yasuda, 2021) ⁵。

調査協力者・調査時期: 東京都内の私立大学において社会科学系の科目を履修する計259名の大学

学生 (男子=94名, 女子=158名, 無回答=7名; 18歳=168名, 19歳=45名, 20歳=9名) に対して、2019年6月 (時期1データ) および2019年7月 (時期2データ) の2回にわたりデータ収集が行われた。また時期1・時期2ともに回答を行った調査協力者 (N=259) の研究1データが分析に用いられた。

調査内容: 合計9項目から構成される心理的エンパワメント尺度 (改訂版) を用いた (表1および Appendix 参照)。本尺度は「強みの顕在化」(3項目; 以下, “顕在化”), 「個の活用」(3項目; 以下, “活用”), 「社会化への準備性」(3項目; 以下, “社会化”) の3つの下位尺度から成っており、各下位尺度の名称も安田 (2016) で使用した顕在化・活用・社会化を改め、初期キャリア形成前の大学生における心理的エンパワメントの実態をより反映させたものとした (例: 社会化への準備性)。

「強みの顕在化」および「個の活用」については旧尺度項目を参考に加筆・修正を行った。一方、「社会化への準備性」については前出の批判的意識の概念を踏まえた内容の項目を新たに設定した。ここでは大学生における批判的意識を、先述の通り、個々の内側 (inward) ではなく外側 (outward), 即ち社会的な要因や資源に対する意識とした。そしてそれは社会考慮 (吉田ほか, 1999) に近似した概念であると判断し、具体的に社会考慮尺度 (吉田ほか, 1999, p. 64) のなかの3項目 (項目番号: 9, 5, 11) に若干修正を加えたものを「社会化への準備性」の尺度項目とした (例: 「今の社会のなかで、自分はどのような行動をとるべきかを考えることがある」)。以上、3下位尺度・合計9項目からなる心理的エンパワメント尺度に対して、「よく当てはまる」(5点) から「全く当てはまらない」(1点) の5件法での回答が求められた。

結果と考察

探索的因子分析: 心理的エンパワメント尺度の因子構造を検討するために時期1データ (N=259) を用いた探索的因子分析 (EFA: exploratory

表 1. 心理的エンパワメント尺度の因子構造・記述統計・信頼性係数

Items	EFA			CFA	M	SD
	顕在化 ¹	活用 ²	社会化 ³	beta		
強みの顕在化 [$\alpha = .77$]						
3. 自分が得意なことを分かっている。	.88	-.02	.01	.79	3.54	.942
1. 自分の強みは何かを理解している。	.84	.00	-.05	.80	3.38	1.01
2. 自分の可能性を知るために、無理だと思うことにもチャレンジする。	.44	.04	.16	.52	3.39	.985
個の活用 [$\alpha = .73$]						
6. 私にはたとえ意見が異なっていたとしても、受け入れてくれる仲間がいる。	-.04	.81	.04	.80	4.02	.764
4. 私には自分のことを分かってくれる仲間がいる。	.08	.77	-.12	.73	4.10	.703
5. 仲間と一緒に頑張り、何かを成し遂げることが好きだ。	-.04	.52	.10	.63	4.09	.850
社会化への準備性 [$\alpha = .83$]						
8. 今の社会がどのような方向に向かっていくのかに関心がある。	-.05	.02	.87	.91	3.73	.883
7. 今の社会で何が問題になっているのかが気になる。	.01	.04	.76	.85	3.67	.903
9. 今の社会のなかで、自分はどのような行動をとるべきかを考えることがある。	.09	-.05	.73	.56	3.53	.991

注: ¹強みの顕在化, ²個の活用, ³社会化への準備性; EFA (探索的因子分析) は時期 1 データ, CFA (確証的因子分析) は時期 2 データに基づいており, 平均値 (M), 標準偏差 (SD), クロンバックの α 係数は時期 1 データから算出された。

factor analysis) を行った。最尤法による推定を行ったところ、固有値 1 以上の因子が計 3 因子抽出され (固有値: 3.27, 1.73, 1.39), スクリーンプロットの分析も併せて行った結果, 3 因子構造による解釈が妥当であると判断された。これら 3 因子による探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を再度行ったところ, それぞれ 31.71% (因子 1), 14.84% (因子 2), 11.94% (因子 3) の合計 58.48% の分散が説明された。因子 1 は「社会化への準備性」(社会化), 因子 2 は「個の活用」(活用), 因子 3 は「強みの顕在化」(顕在化) に関する各 3 項目から構成されていた。顕在化と活用の因子相関は $r=.36$, 顕在化と社会化は $r=.23$, 活用と社会化は $r=.30$ となっていた。各尺度項目の因子負荷および平均値 (SD) を表 1 に示した。

表 1 の EFA における各下位尺度の因子負荷を見ると, 多くが .70 から .80 程度の高い水準で推移していたものの, 項目 2 (顕在化) および項目 5 (活用) については, それぞれ, .44 と .52 と比較的低い数値となっていた。また活用は他の下位尺度に比して, 高い平均値を示していた。

確証的因子分析: 次に探索的因子分析によって得られた 3 因子構造の安定性を確かめるために, 時期 2 データ (N=259) を用いた確証的因子分

析 (CFA: confirmatory factor analysis) を行った。その結果, 探索的因子分析と同様に, 3 因子構造のデータ適合が確認された ($\chi^2/df=1.91$; CFI=.97; NFI=.94; RMSEA=.05)。CFA における因子負荷も .52 から .80 (顕在化), .63 から .80 (活用), .56 から .91 (社会化) と適切な値をとっていた。さらに因子相関は .43 (顕在化と活用), .26 (活用と社会化), .31 (顕在化と社会化) となっていた。

信頼性の検討: 次に心理的エンパワメント尺度の信頼性を検討するために, クロンバックの α 係数 (時期 1 データ) および再テスト信頼性 (時期 1・時期 2 データ) を算出した。その結果, クロンバックの α 係数は, .77 (顕在化), .72 (活用), .83 (社会化) と項目数を考慮しても十分な値を示していたことが明らかになった (表 1)。また再テスト信頼性については, 時期 1 データとその翌月に収集した時期 2 データとの相関係数を算出することにより確かめられた。結果, 顕在化 ($r=.64$), 活用 ($r=.64$), 社会化 ($r=.57$) と十分な数値を示していた。

以上の探索的および確証的因子分析および信頼性の検討の結果により, 心理的エンパワメント尺度の 3 因子構造が確認できたと同時に, 各下位尺度は十分な信頼性を有していることが明らかになった。

研究 2

目的

研究 2 では、研究 1 において安定した因子構造および信頼性が得られた尺度を活用して、心理的エンパワメントが大学生の主観的ウェルビーイングにどのような影響を及ぼすかを検討する。そのために、人生の意味 (Meaning in Life : Steger, Frazier, Oishi, & Kaler, 2006)、人生満足度 (Satisfaction with Life : Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985)、自尊感情 (Self-Esteem : Rosenberg, 1965) といった主観的ウェルビーイングの関連指標がどの程度、心理的エンパワメントによって説明されるかの分析を行う。また人生満足度および自尊感情との関連性については、コミュニティ心理学 (community psychology) における重要概念の一つである心理的コミュニティ感覚 (Psychological Sense of Community : McMillan & Chavis, 1986 ; Perkins, Florin, Rich, Wandersman, & Chavis, 1990) も含めた分析モデルにおける検討を行う。

方法

使用データ：研究 2 において使用した分析データは、研究 1 データ (時期 1・時期 2 データともに $N=259$) そして新たに 2021 年 12 月 ($N=87$) と 2022 年 5 月 ($N=202$) の 2 回にわたり調査協力者に対して行った研究 2 データ ($N=289$) である。研究 2 データにおけるデータ収集は、東京都内の私立大学において社会科学系の科目を履修する大学生であった (男子 = 107 名, 女子 = 179 名, 無回答 = 3 名; 18 歳 = 128 名, 19 歳 = 49 名, 20 歳 = 60 名, 21 歳 = 26 名, 22 歳 = 3 名, 24 歳以上 = 5 名)。

調査内容：研究 2 において、「強みの顕在化」(以下, “顕在化”), 「個の活用」(以下, “活用”), 「社会化への準備性」(以下, “社会化”) の 3 つの下位尺度で構成される心理的エンパワメント尺度との関連が調査された。具体的には、英語の原版の日本語翻訳版として開発された下記の 4 尺度が用いられた。

①人生の意味尺度 : Steger et al. (2006) によって開発された Meaning in Life Questionnaire (MLQ) の日本語版である「人生の意味尺度」(島井・大竹, 2005) の合計 10 項目が使用された。人生の意味の存在 (presence) に関する 5 項目 (例 : 「私の人生にははっきりとした目的がある」) と人生の意味の探索 (search) に関する 5 項目 (例 : 「私は自分の人生の目的や目標を探している」) について、「非常によくあてはまる」(7 点) から「まったくあてはまらない」(1 点) の 7 件法での回答が求められた。クロンバックの α 係数は .85 (意味探索) および .80 (意味存在) であった。

②人生満足度 : The Satisfaction with Life Scale (SWLS : Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) のに日本語版である「人生満足度尺度」(大石, 2009) を用いた。人生満足度尺度は計 5 項目から構成されており (例 : 「ほとんどの面で、私の人生は私の理想に近い」), 「非常によく当てはまる (7)」から「全く当てはまらない (1)」の 7 件法による回答が求められる。本データにおける信頼性の推定を行ったところ、クロンバックの α 係数は .85 と算出された。

③自尊感情 : Rosenberg Self-Esteem Scale (Rosenberg, 1965) の日本語版である「自尊感情尺度」(山本・松井・山成, 1982) を使用した。自尊感情尺度は計 10 項目からなっており (例 : 「少なくとも人並には、価値のある人間である」), 回答者は「とてもよくあてはまる (5)」から「全くあてはまらない (1)」の 5 件法による評定を求められた。本データにおける信頼性の推定を行ったところ、クロンバックの α 係数は .83 と算出された。

④コミュニティ感覚尺度 : Perkins, Florin, Rich, Wandersman, & Chavis (1990) によって開発された Sense of Community Index (SCI) の日本語版である「コミュニティ感覚尺度」(笹尾・小山・池田, 2003) を用いた。コミュニティ感覚尺度は「統合・ニーズの達成 (Integration and Fulfillment of Needs)」 「メンバーシップ (Membership)」 「影響力 (Influence)」 「情緒的結

表 2. 心理的エンパワメント尺度と MIL 尺度の相関係数表

	時期 1 データ					時期 2 データ		
	顕在化 ¹	活用 ²	社会化 ³	意味探索	意味存在	顕在化 ¹	活用 ²	社会化 ³
時期 1								
強みの顕在化	1.0	--	--	--	--	--	--	--
個の活用	.32*	1.0	--	--	--	--	--	--
社会化への準備性	.30*	.19*	1.0	--	--	--	--	--
意味探索	.29*	.32*	.38*	1.0	--	--	--	--
意味存在	.58*	.28*	.25*	.34*	1.0	--	--	--
時期 2								
強みの顕在化	.64**	.30**	.28**	.24**	.53**	1.0	--	--
個の活用	.20**	.64**	.07	.17**	.22**	.34**	1.0	--
社会化への準備性	.22**	.14*	.57**	.24**	.25**	.34**	.23**	1.0

注: ¹強みの顕在化, ²個の活用, ³社会化への準備性; * $p < .01$; N=259

表 3. 意味存在・探索 (MIL 尺度) の規定因に関する重回帰分析

		意味存在					意味探索				
		B	SE B	β	$\triangle R^2$	$\triangle F$	B	SE B	β	$\triangle R^2$	$\triangle F$
STEP 1					.00	.18				.01	1.11
	性別	-.02	.15	-.01			.07	.14	.03		
	学年	.07	.13	.03			.18	.12	.10		
STEP 2					.33	34.69**				.20	18.33**
	性別	.00	.13	.00			.08	.13	.03		
	学年	.11	.11	.05			.25	.11	.14*		
	強みの顕在化	.67	.08	.51**			.15	.08	.13		
	個の活用	.21	.10	.12*			.33	.10	.21**		
	社会化への準備性	.04	.08	.03			.37	.08	.29**		

注: * $p < .05$; ** $p < .01$; N=259

合 (Shared Emotional Connection)」の4つの下位尺度 (各3項目) の合計12項目から構成される尺度であり, 回答者が各自が所属するコミュニティを1つ挙げ, 各項目に回答するものである。本研究では『あなたが所属するコミュニティ (公式・非公式なものの何でも可) のうち, 「一番好きな, 親しみが持てるコミュニティ」をあげるとするとそれは何ですか? コミュニティの名前を一つだけ書いてください (例: サークル)』という設定にした。データ分析の結果, 4因子構造は得られず, 1因子構造が妥当であると判断され, 当該因子をコミュニティ感覚とした。クロンバックの α 係数を算出したところ .83 となっていた。

結果と考察

意味存在・探索 (MIL 尺度) との関連性: 人

生の意味におけるデータ分析は, 研究1データ (N=259; 時期1・時期2データ) が用いられ, 表2および表3のとおりの結果となった。意味存在・意味探索と心理的エンパワメントとの間には, 全般的にプラスの相関関係があり, 特に「顕在化」と「意味存在」($r=.58$; $p < .01$), 「社会化」と「意味探索」($r=.38$; $p < .01$) に関しては強い相関が認められた (表2)。また「顕在化」と「意味存在」に関しては, 時期2と時期1データとの2時点においても, 同程度の相関関係が維持されていた ($r=.53$; $p < .01$; 表2参照)。

人生の意味 (存在・探索) を目的変数, 属性ならびに心理的エンパワメントを説明変数とした重回帰分析を行ったところ, 分析モデルはそれぞれ 33% (意味存在) と 21% (意味探索) の説明率を有していた (表3)。なかでも「顕在化」は「意

味存在」に ($\beta = .51$; $pr = .50$; $p < .01$), 「社会化」は「意味探索」に ($\beta = .29$; $pr = .29$; $p < .01$) 強い影響を及ぼしていたことが明らかになった。

これらの結果は、大学生が自分自身の強みや可能性をしっかりと理解することは、自分の人生の意味やライフキャリアの目的を確かに見出すことにつながっていたことを意味している。そして大学生が社会化の準備性を高める、即ち自分の置かれている状況や社会問題への関心をを持つ(持ち始める)ことは、自らの人生・ライフキャリアの意味を探究することと連動していたことを示唆している。

人生満足度および自尊感情への影響: 次に心理的エンパワメントおよびコミュニティ感覚が人生満足度や自尊感情にどのように影響を及ぼすかについての分析を研究2データ (N=289) を用いて行った(表4・表5)。

その結果、他の変数間の相関に比して、顕在化と自尊感情との相関が強かったこと明らかになった ($r = .55$, $p < .01$)。実際、自尊感情に関しては、顕在化以外との相関は認められなかった (ie., 活用: $r = .06$; 社会化: $r = .09$; $ps = n.s.$)。人生満足度については、顕在化 ($r = .39$; $p < .05$), 活用 ($r = .34$; $p < .05$) との相関が認められた。さらにコミュニティ感覚と活用との相関も認められた ($r = .34$; $p < .01$)。また人生満足度と自尊感情の間には比較的強い相関が認められた ($r = .57$; $p < .01$)

さらに人生満足度と自尊感情を規定する要因に関する分析を行ったところ、モデル全体で36%の分散が説明されており、特に、顕在化 ($\beta = .29$; $pr = .32$) と活用 ($\beta = .30$; $pr = .31$) そしてコミュニティ感覚 ($\beta = .14$; $pr = .27$) が人生満足度にプラスの影響を及ぼしていた ($ps < .01$)。また男子学生が女子学生よりも人生満足度が高かったこと

表 4. 心理的エンパワメント, コミュニティ感覚, 自尊感情の相関係数表

	顕在化 ¹	活用 ²	社会化 ³	コミュニティ感覚	人生満足度	自尊感情
強みの顕在化	1.0					
個の活用	.28**	1.0				
社会化への準備性	.22*	.10	1.0			
コミュニティ感覚	.04	.34**	-.01	1.0		
人生満足度	.39*	.34**	.10	.18	1.0	
自尊感情	.55**	.06	.09	.07	.57**	1.0

注: ¹強みの顕在化, ²個の活用, ³社会化への準備性; * $p < .05$; ** $p < .01$

表 5. 人生満足度と自尊感情の規定因に関する重回帰分析

	人生満足度					自尊感情				
	B	SE B	β	ΔR^2	ΔF	B	SE B	β	ΔR^2	ΔF
STEP 1				.06	9.04*				.05	.62
性別	.57	.14	.23*			-.02	.08	-.01		
学年	.13	.09	.08			.06	.05	.06		
STEP 2				.13	22.66*				.01	2.46
性別	.52	.13	.21*			-.03	.08	-.02		
学年	.13	.09	.07			.06	.05	.06		
コミュニティ感覚	.59	.12	.26*			.12	.07	.09		
STEP 3				.36	33.85*				.29	35.88*
性別	.46	.12	.19*			-.01	.07	-.01		
学年	.07	.08	.04			.01	.05	-.01		
コミュニティ感覚	.31	.11	.14*			.02	.07	.01		
強みの顕在化	.44	.07	.29*			.43	.05	.48*		
個の活用	.52	.09	.30*			.09	.05	.09		
社会化への準備性	-.00	.06	-.00			.02	.04	.03		

注: * $p < .01$

も明らかになった ($\beta = .19$; $ps < .01$)。その一方で、自尊感情に関してはモデル全体で 29% の分散が説明されていたものの、顕在化のみが統計的に有意な規定因となっていた ($\beta = .48$; $pr = .46$; $p < .01$)。

以上を踏まえると、人生満足度の高さには、大学生が自らの強みを認識するだけでなく、それと同程度あるいはそれ以上に、仲間関係のなかで自らをどう活かし、コミュニティに所属感を抱けるかが関係していたと言える。しかし自尊感情の高さについては、そのような周囲との関係性ではなく、あくまで大学生が自らの強みを顕在化できているかに関係があったと考えられる。

総合考察

本研究の目的は、心理的エンパワメントが大学生の主観的ウェルビーイングに与える影響を検討することであった。そのために、心理的エンパワメント尺度の改訂を行い、定義に即した因子構造に基づく測定が可能になるようにした。探索的ならびに確証的因子分析の結果、安田 (2016) の尺度開発では実現ができなかった因子構造の安定化およびそれに基づくモデルの分析が可能となった。3つの下位尺度は「強みの顕在化」「個の活用」「社会化への準備性」と大学生における心理的エンパワメントの実情をより踏まえたものに変更した。特に、社会化への準備性に関しては、初期キャリア (ie., 社会人経験) の形成前という大学生の特徴を踏まえつつ、エンパワメント概念とは不可分な批判的意識を尺度に統合することを試みた。

心理的エンパワメントと主観的ウェルビーイングには、概ねプラスの関係性が認められ、大学生のエンパワメントは、少なくとも間接的には、彼(女)等のウェルビーイングの向上につながることが確認された。他方、ミクロ・メゾ・マクロシステム (Bronfenbrenner, 1977; 1979) を基本的枠組みとして形成される心理的エンパワメント概念、即ち「強みの顕在化」(≡ミクロ)、「個の活用」(≡メゾ)、「社会化への準備性」(≡マクロ)

によって構成される3つの下位尺度は、大学生のウェルビーイングと多様な相関のパターンを示していた。

まず自身の強みを確認する・顕在化させることは、自身の将来やキャリアそして人生のゴールを認識する、即ち人生の意味存在を強めることにつながっていた。しかし一方で、自身の目的やゴールを探し求める行動、即ち意味探索においては、強みの顕在化ではなく、むしろ周囲との関係性において自分をどう活かすか(「個の活用」)そして自己を広く社会のなかでどう捉えるか(「社会化への準備性」)が影響を及ぼしていた。このことから、大学での学びや社会生活の質向上のためには、自身に内在する強みや得意分野をより伸ばし将来への自信につなげつつ、より外在する人間関係や社会関係といった「資源 (resource)」の活用法を知り、多様な組織的・社会的な「課題 (issue)」に向き合うための方法論を習得する学びが有効であると言える。

心理的エンパワメントは、大学生の人生満足度や自尊感情にも様々なパターンに関連性をもっていった。人生満足度と自尊感情とは互いに関連が深い概念であるものの、別々の心理的エンパワメントの要因がそれらを規定していたことが明らかになった。具体的には、自尊感情を規定していたのは強みの顕在化のみであったのに対して、人生満足度については強みの顕在化のほか個の活用さらにはコミュニティ感覚がプラスの規定因となっていた。自己の強みを認識し、自分に自信をつける(自尊感情を高める)と共に、より納得・満足がいく大学生活を送るために、自らを周囲の関係性(仲間関係)のなかに置き行動する(個を活用する)、そして様々なコミュニティにおける所属感(コミュニティ感覚)を維持・促進することが大切であると言える。

本研究の主な焦点は大学生における心理的エンパワメントの検討であった。今後も大学生を対象とした関連研究が継続されるとともに、その他のライフキャリアの段階(例: 初期キャリア、キャリアトランジション、高齢期や定年後のキャリア)

にある多様な対象についての検討がなされることが有意義であると考え。そこでは、心理的エンパワメント概念の枠組みこそ共通であるが、各要因（例：顕在化・活用・社会化）の内容が定性的そして定量的に異なってくる。そのため、新たな分析枠組みの設定を通しての研究が必要になってくると言えよう。

注

- 1 “[A] process, a mechanism by which people, organizations, and communities gain mastery over their affairs” (Rappaport, 1987, p.122). 多様なコンテキスト（文脈）に応用可能にするため、あえて抽象度を上げ定義されているところに特徴がある（参考：安田, 2019）。
- 2 古くJ.S.ミル（Mill）の「自由論」（On Liberty, 4th ed., 1869）の「幸福の一要素としての個性」の章のなかでは「各人は、自分の個性の発展に比例して、自分にとっていっそう価値あるものとなり、また、その結果として、他の人々にとってもいっそう価値あるものになることができる。それぞれの人間の存在にいっそう充実した生命が宿り、（個人という）構成単位の生命力が高まると、そうした単位から構成される集合体の生命力も高まることになる」（pp. 141-142）と記されている〔J.S.ミル自由論（関口 訳, 2020）〕。
- 3 具体的には、自分自身がつまみ（強みや長所）について：「その力に気がつきかけや経験は何であつたか」（顕在化）、「その力を活かしていると感じる時はどのような時か」（活用）、「その力をグループ（集団）やコミュニティのなかで活かしていると感じる時はどのような時か」（社会化）という設問に関する自由回答が求められ、それらの回答を参考にして作成された尺度項目に基づくデータ収集が行われた。因子構造および尺度の信頼性・妥当性に関するデータ分析の結果、顕在化（3項目）、活用（4項目）、社会化（3項目）を下位尺度とする心理的エンパワメント尺度が完成した（安田, 2016）。
- 4 エンパワメント概念に基づくプログラム評価においてもその重要性が指摘され、そこでは批判的意識と

は、より深く（deep）、意味があり（meaningful）、現実的かつ本質的（realistic and reality-based）な視点から自らの状況や環境を理解することを意味している [Critical consciousness, or conscintizacao (Portuguese), refers to attaining a deep, meaningful, realistic, and reality-based understanding of one's world (Patton, 2017, p.53)]。

- 5 英語版の尺度項目は次の通りである：1) I understand what my personal strengths are. 2) I try to challenge myself, even if I may not succeed. 3) I know what I am good at. 4) I have friends who know a lot about me. 5) In order to achieve something, I prefer to work with my friends. 6) I have friends who accept me even if we have different opinions. 7) I am concerned about the issues that are raised in the society that I live in. 8) I am interested in knowing the directions in which our society is moving towards. 9) I consider the way I should be acting as a member of society. 項目1から項目3は“strength”（「強みの顕在化」）、項目4から項目6は“network”（「個の活用」）、項目7から項目9は“critical awareness”（「社会化への準備性」）の因子の尺度項目である（Yasuda, 2021）。

参考文献

- Bronfenbrenner, U. (1977). Toward an experimental ecology of human development. *American psychologist*, 32(7), 513-531.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Harvard university press.
- Dalton, J. H., Elias, M. J., & Wandersman, A. (2001). *Community Psychology: Linking individuals and communities*. Belmont, CA: Wadsworth.
- Diener, E. D., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with

- life scale. *Journal of personality assessment*, 49(1), 71-75.
- Gutierrez, L. M. (1994). Beyond coping: An empowerment perspective on stressful life events. *Journal of Sociology & Social Welfare*, 21, 201-219.
- Maton, K. I. (2008). Empowering community settings: Agents of individual development, community betterment, and positive social change. *American journal of community psychology*, 41(1), 4-21.
- マクリーン S., & ハンソン R. (2019) (木全和巳 訳) 「パワーとエンパワメント」 クリエイトかもがわ
- ミル, J. S.: 関口正司 訳. 自由論. 岩波書店, 2020 (原著 Mill, J. S. On liberty. John W. Parker & Son, 1859)
- 三島一郎 (2001) 精神障害回復者クラブ: エンパワメントの展開 山本和郎編 「臨床心理学的地域援助の展開: コミュニティ心理学の実践と今日的課題」 (pp. 164 – 182) 培風館
- McMillan, D. W., & Chavis, D. M. (1986). Sense of community: A definition and theory. *Journal of community psychology*, 14(1), 6-23.
- Patton, M. Q. (2017). Pedagogical principles of evaluation: Interpreting Freire. In M. Q. Patton (Ed.), *Pedagogy of Evaluation*. New Directions for Evaluation, 155, 49–77.
- Perkins, D. D., Florin, P., Rich, R. C., Wandersman, A., & Chavis, D. M. (1990). Participation and the social and physical environment of residential blocks: Crime and community context. *American journal of community psychology*, 18(1), 83-115.
- Rappaport, J. (1987). Terms of empowerment/exemplars of prevention: Toward a theory for community psychology. *American journal of community psychology*, 15(2), 121-148.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton university press.
- Sarason, S. B. (1974). *The psychological sense of community: Prospects for a community psychology*. Jossey-Bass.
- 笹尾敏明・小山梓・池田満 (2003) 次世代型ファカルティ・ディベロップメント (FD) ・プログラムに向けて: コミュニティ心理学的視座からの検討 国際基督教大学学報 I-A, 教育研究 45, 55-71.
- 島井哲志・大竹恵子 (2005). 日本版「人生の意味」尺度 (MLQ) の開発 日本ヒューマン・ケア心理学会第7回 大会発表論文集, 29-30.
- Steger, M. F., Frazier, P., Oishi, S., & Kaler, M. (2006). The Meaning in Life Questionnaire: Assessing the Presence of and Search for Meaning in Life. *Journal of Counseling Psychology*, 53(1), 80-93.
- 田村真悠・山本美由紀. (2021). コミュニティ参加の有無が心理的エンパワメントおよび大学生の対人信頼感に及ぼす影響について. *日本健康医学会雑誌*, 30(1), 100-107.
- 山本真理子, 松井豊, & 山成由紀子. (1982). 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究*, 30(1), 64-68.
- 安田節之・梅崎修・椋田亜砂美・三好真人 (2020) チームワーク形成を目的とした PBL 型教育の効果測定: 研修評価アプローチによる検討 *生涯学習とキャリアデザイン* 18 (1), 11-29.
- Yasuda, T., Umezaki, O., Mukuta, A., & Miyoshi, M. (2018). Evaluating Teamwork in Japanese High School Students: A measurement tool to assess team empowerment. Paper presented at the 126th Annual Convention of American Psychological Association (San Francisco, CA).
- Yasuda, T. & Saito, Y. (2018). Psychological Empowerment, Sense of Community, and Meaning in Life among Japanese College Students. Paper presented at the 126th Annual Convention of American Psychological Association (San Francisco, CA) 2018 年 8 月
- Yasuda, T. (2021). Development of a measure

that assesses a psychological empowerment of Japanese students. Paper presented at the 126th Annual Convention of American Psychological Association (Virtual).

安田節之 (2019) コミュニティ心理学研究のあり方 コミュニティ心理学会研究委員会編 コミュニティ心理学: 実践研究のための方法論 (pp. 14-23). 新曜社

安田節之 (2018) 産学連携・PBL 型教育プログラムの評価研究: チームエンパワメントの効果検証に向けて 日本心理学会第 82 回大会 (於: 仙台国際センター)

安田節之 (2016) 心理的エンパワメント尺度開発に関する予備調査: 大学生のライフキャリア課題の理解に向けて 生涯学習とキャリアデザイン 14 67-76

吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田晴彦・北折充隆 (1999) 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要, 46, 53-73.

Zimmerman, M. A., & Eisman, A. B. (2017). Empowering interventions: Strategies for addressing health inequities across levels of analysis. In M. A. Bond, I. Serrano-García, C. B. Keys, & M. Shinn (Eds.), APA handbook of community psychology: Methods for community research and action for diverse groups and issues (pp. 173–191). American Psychological Association.

Zimmerman, M. A. (2000) Empowerment Theory: Psychological, Organizational and Community levels of analysis. In J. Rappaport & E. Seidman (Eds.) Handbook of Community Psychology (pp. 43-59). Kluwer Academic/Plenum Publishers.

Appendix

教示文: 以下の設問は、普段のあなたの様子についてお聞きするものです。各設問について、全く当てはまらない (1) からよく当てはまる (5) のうち、最もあなたに近いと思う番号を 1 つ選んでください。

項目:

1. 自分の強みは何かを理解している。
2. 自分の可能性を知るために、無理だと思うことにもチャレンジする。
3. 自分が得意なことを分かっている。
4. 私には自分のことを分かってくれる仲間がいる。
5. 仲間と一緒に頑張り、何かを成し遂げることが好きだ。
6. 私にはたとえ意見が異なっていたとしても、受け入れてくれる仲間がいる。
7. 今の社会で何が問題になっているのかが気になる。
8. 今の社会がどのような方向に向かっていくのかに関心がある。
9. 今の社会のなかで、自分はどのような行動をとるべきかを考えることがある。

Relations between Psychological Empowerment and Subjective Well-being among Japanese University Students.

YASUDA Tomoyuki

COVID-19 changed the ways how individuals live their lives socially. Central to the adjustment of one's behavior is the ways in which individuals engage in self-control, so that Subjective Well-Being (SWB) can be maintained. This study examined how SWB of Japanese college students could be predicted by Psychological Empowerment that is composed by subscales of Strength (3 items), Network (3 items), and Critical Awareness (3 items). Based on the analyses of the data

obtained from 259 students (Study 1) and 289 students (Study 2), evidence was found that Satisfaction with Life was predicted by Strength, Network and Psychological Sense of Community in a positive manner; yet Self-Esteem was strongly and positively predicted by Strength only.

Further investigations need to examine rather differential roles in which psychological empowerment play in explaining one's overall well-being.